

「李炳鎬『百濟仏教寺院の成立と展開』社会評論、 2014⁽¹⁾」の紹介と検討

近 藤 浩 一

1. はじめに

本書は、韓国の国立中央博物館に在職する李炳鎬氏が、この10年の間に発表してきた百濟の仏教寺院史に関わる論考を骨子として、日本の早稲田大学に博士論文として提出した『百濟仏教寺院の特性形成と周辺国家に及ぼした影響—瓦当・塑像伽藍配置を中心に—』の前半部（2部構成からなる第1部⁽²⁾）を中心にまとめた論文集である。著者は、2005年と2006年に在職する国立中央博物館の雑誌である『美術資料』に定林寺址関連の論考を出したのをかわきりに、数年のうちに10編以上の百濟寺院（倭国の飛鳥寺・新羅の興輪寺など百濟の影響を受けた周辺地域の寺院を含む）の論考を公表し、本書を完成させている。さらに、修士論文でもある最初の公表論文が「百濟泗泚都城의 (の) 造営過程」（『韓国史論』47、2002）であり、その後も道路遺構など百濟都城に関する発掘成果をもとに研究を行っていることから、現在韓国における寺院を中心とする百濟都城研究の第一人者といえる。

著者の問題関心は、本書の後記で述べられているように、1998年から勤務する国立博物館の学芸員の立場から、遺物と遺跡を通して既存の韓国古代史像の再構築に努めることにある。10年後その先まで、新たな資料と向き合いそれを達成することまでを掲げている。

最初のきっかけは入館間もない1998年に百濟史全体を対象とした国内最初

の特別展を担当したことにあったというが、著者はこれに少しでも近づくために、著者の元々の専門分野である文献史学・考古学はもとより、美術史・建築史などの他分野の成果を十二分に取り入れている。本書を読めば、著者が学際的な方法論をきちんと身に付けて、1点1点の遺物・遺跡を解釈する様子を自然と感ずることができる。

さらに本書の目的はそれにとどまらず、遺物・遺跡によるデータを、歴史学の掲げる中国・日本列島を含めた東アジアの文化交流史のなかに位置づけることにあると述べる。本書は、百濟仏教・寺院史を基軸としながらも、東アジア文化交流史という壮大な構想のもとに生まれたことが読み取れる。

2. 本書の内容

本書の大まかな構成は次の通りである。

目次

序論 問題の設定と研究の方法・本文の構成

I 百濟の仏教受容と初期寺院

1 漢城期百濟の仏教受容

2 熊津時期の瓦当と寺院

II 泗泚遷都と百濟式寺院の成立、定林寺址

1 定林寺址出土塑像と伽藍配置の特徴

2 都城のランドマークとしての定林寺址

III 王陵と結びついた寺院、陵山里寺址

1 陵山里出土木簡の性格

2 陵山里寺址出土瓦当の分類と需給体系

3 扶余陵山里寺址の伽藍中心部の変遷とその意味

IV 泗泚時期における百濟寺院の諸様相

1 定林寺式伽藍配置の展開過程

2 泗泚時期における塑像の展開過程

3 文化交流の観点からみた百済寺院の位相

結論

参考文献 英文要約

以下やや冗長になるが、原文が韓国文であるため、韓国における百済仏教・寺院史関連の最新の研究現況を紹介する意味を込めて、本書の章立てにしたがい、それぞれの内容及び論点を簡単に確認しておきたい。⁽⁴⁾

百済の仏教寺院に関する発掘調査・研究は、植民地期の1910年代に関野貞の古蹟調査をかわきりとする日本人研究者（官学者）によって始められた。序論では、そうした第1期の植民地期から、若干停滞するも韓国人の研究者が中心となる戦後～70年代後半までの第2期、扶余・公州・益山地域の主要廃寺跡の発掘が始まった90年代初期までの第3期、それらの地域の再発掘が行われ華々しい成果をもとに研究が本格化する90年代半～現在までの第4期に区分して、各時期の研究動向をコンパクトに整理している。これによれば、韓国の歴史学・考古学では植民地主義の克服を最大課題としているが、著者の研究方法も概ねこれを継承することに言及する。やや先走れば、本書の中で百済式という用語を多用し、百済にて変容した姿を強調するのも、百済文化の独自性を払拭した日本人研究者の研究スタイルに異を唱えるためであるとみられる。

また著者は、既存の研究の問題点として具体的な資料や根拠がそれほど提示されていないことを指摘し、現在までの韓国内における遺物・遺跡を扱った考古学及び、歴史学・建築史・美術史・仏教史の研究動向を詳細にチェックする。これを通して著者は、何より先入観を排除した遺物・遺跡の活用、遺跡相互間の理解の重要性を唱える。さらに百済寺院の特性並びに影響を明らかにするためには、学際的なアプローチ並びに東アジア文化交流史の流れの中で証明することが不可欠であることを強調し、本書で考察すべき論点、

章立てを提示する。

I は、本書の中心がⅡ以降の 538 年泗泚（現在の扶余）遷都後の寺院研究であるため分量はさほど多くないが、王都が漢城（ソウル）にあった漢城期と、高句麗の攻撃によって都を熊津（公州）に遷都後の熊津期（475～538 年）の百濟仏教・寺院を論じる。

まず、枕流王元年（384）に東晋より仏教を受容した問題など、僅かな史料であるが百濟仏教の淵源に触れる。その背景には、仏教を介した高句麗と前秦の関係への対抗心が強く作用し、風納土城から出土した獣面文・蓮華文の瓦当は中国との直接的交流を示すという。

次に、近年具体的な研究が行われつつある大通寺址式瓦当を中心とする、熊津期の瓦当（最初に成立した公山城式瓦当なども含む）から、当時の仏教の様相に触れる。既存の研究でも大通寺（遺構は不明）及びその瓦当が南朝梁の技術をもとに製作されたことは指摘されたが、本研究では熊津期の瓦当の成立における中国南朝の影響を一層評価する。さらに大通寺址式瓦当が、王宮の公山城や泗泚地域で多数出土しているのに加え、新羅の慶州興輪寺址式瓦当の成立にも直接影響していることに着目し、大通寺を建立する過程で官営造瓦工房のような体制が成立したと推定している。ただし、このような過程にて少数ながら高句麗の影響があったことも指摘する。中国南朝と僅かの高句麗の影響によって百濟寺院が成立・展開したという視点は、次の時代の泗泚期まで著者の首尾一貫した主張である。

本書のメインのひとつⅡは、泗泚都城の中央に位置する定林寺址に対して、他の研究者が注目しなかった遺物と遺構を新たな根拠に創建時期や寺院伽藍を再検証し、それらと文献史料を丁寧に対比させながら寺院の創建背景・目的から地位・役割までを論じている。

まず、100 点を越える出土数でありながら研究の希少な塑像に対して、そ

の定義（当初報告書では陶俑とした）にはじまり、形態・製作技法・製作地などの分析、破片の復元、中国及び国内の諸寺院出土の塑像との比較を通して、系統と奉安場所を特定する。それにより、定林寺址出土の塑像は木塔を荘厳した塔内塑像であって、この場所には現存の石塔に先行する木塔址が存在したことを立証した。また塑像の年代は、三足土器や中国製青磁壺片・南朝特有の捧宝珠菩薩像などの共伴遺物から概ね泗泚遷都前後と推定できるが、『梁書』などの史料に541年梁が經典類と工匠・画師など専門技術者を百済に送ったとあるのでその頃であると断定する。

次に、都城内でも最初に建てられたことがわかった定林寺の伽藍配置を、2008年の再調査で回廊北端から発見された「付属建物」遺構に焦点を当てて再検討する。既存の研究では中門と塔・金堂・講堂が南北一直線上に配置されそれを回廊が囲むと理解されてきたが、講堂と東西回廊は北回廊を介して連結するのではなく回廊北端の「付属建物」によって連結され、その北の講堂の東西には別途建物がありそれとも連結していたことを明らかにする。この東西の付属建物の性格は、中国や益山弥勒寺などの配置例を参照すれば、僧房よりは公的性格の強い「東堂・西堂」（「東室・西室」と推定できるといふ。著者はその他にも新たな事実を指摘するが、定林寺の木塔・東堂・西堂を含む伽藍配置並びに出土遺物に反映された諸技術は、南朝梁からの援助・影響によるものであったと述べる。ただし、金堂跡の二重基壇の下成礎石や講堂址東西の別途建物址などは高句麗の影響であることを強調し、南朝の影響を主に高句麗文化を部分的に受容して創建されたこれを、「定林寺式伽藍配置」と定義している。そして、百済滅亡時まで百済寺院のモデルとなったのは定林寺であり、百済式寺院はこれをもって成立したと位置づける。

さらに著者は、前述の成果並びに塑像の製作・モチーフに一層注目し、寺院を創建した百済聖王との関係や近年の泗泚都城内の発掘成果を踏まえながら、定林寺建立の背景と目的にまで言及している。まず、創建期の木塔跡出土の塑像に転輪聖王を主人公とする礼仏図の場面がみられることから、百済

聖王は俗世を越えた仏教界の支配者を志向していたと指摘する。また金堂跡で出土した大型塑像は、百濟最初の造仏記事でもある『日本書紀』欽明天皇6年(545)条にみられる丈六仏であると特定する。著者によれば、この記録は前述の梁の技術提供を示す541年の記録を裏付ける内容であり、定林寺の創建は、百濟王室の絶対的支援のもとで仏教造像を通した国内はもとより加耶諸国にも及ぶ功德の実践であったと論じる。

加えて著者は、定林寺のこうした性格を一層際立たせるのが王宮との位置関係であるとし、創建当時の都城内部の区画と王宮区域を検証する。まず、大半の道路遺跡の開設時期は発掘資料による限り6世紀後半頃であって、遷都当初に街路区画はなかったと述べる。次に王宮区域は、植民地期に製作された地籍図と滅亡期の「大唐」銘瓦、出土木簡などによれば、旧衙里の正方形区画に特定できると指摘する。これにより定林寺と王宮の配置関係は非常に密接であり、中国の都城で王宮の南側に計画に基づいて造営され、王宮と共にランドマークであった洛陽永寧寺や南京同泰寺に類似すると結論づける。

もうひとつのメインのⅢは、王陵群である陵山里古墳群に隣接し、舍利龕銘の出土で木塔の建立が567年と推定される陵山里寺址に対して、出土木簡の検討及び500点を越える出土瓦当の分析から、伽藍中心部の変遷過程までを通して検討する。

まず出土木簡の性格について、既存の研究では寺院以外に羅城や東門との関係を重視する見解が提起されてきたが、そこで不十分であった遺構との関係に焦点を当て諸説を強く否定する。著者は、未公開の部分も多く曖昧にされてきた木簡の出土現況と位置を一覧表にまとめ、この情報から廃棄年代を特定し、木簡の性格までを推定している。詳細は述べないがこれによれば、木簡の大半は既存の見解の通り中門址南側の初期自然排水路からの出土であるが、寺院創建以降の遺構である東南側の初期自然排水路及び第二石築排水施設や割石集水槽からも数点見つかっていることは、木簡が寺院建立以前に

使用されたものでないことを裏付けると指摘する。ゆえに木簡の廃棄年代も、木塔建立前後から6世紀後半までの広範囲に設定でき、木塔建立の段階にその北側にあった初期講堂址と関わる施設で使用されたものが流れ込んだ可能性などが想定できるという。木簡の性格としては、8次調査で発見された2002-1号四面木簡のように人々に支給した食米の内訳を記した中間帳簿をはじめ、物品の生産地と移動を知らせる300号・306号・310号などに加え、仏教や死者の儀礼と関連した木簡も存在することを考慮する。つまり、その場所には倉庫施設や行政組織が存在し、木簡類は「陵山里寺址の造営・整備過程」において使用、廃棄されたものと結論付けた。

そして次には、木簡との関係を指摘した初期講堂址など初期建物群の年代・性格を特定するために、伽藍中心部の主要建物の建立順序を明らかにする。まずその前提作業として、502点に及ぶ瓦当の型式分類と相對編年を新たに実施し、その案を踏まえ瓦当の建物址別の分布様相を緻密に整理する。それによりこの寺院の伽藍中心部は、講堂址とその「付属建物」である不明建物址Ⅰ、工房址Ⅱ、そして不明建物址Ⅱ、工房址Ⅰなどがまず建立され、その後には木塔址と金堂址、中門址、回廊址の順で建立されていったとしている。そのため初期建物址群は、木塔址や金堂址に先んじて造営され、寺院とは異なる何らかの特殊な目的を有していたという。加えて、寺址最下層からは550年前後に編年できる遺物（中国製青磁片・硯片、土器類）が出土していることも、聖王陵の築造との関連を一層窺わせるとする。

さらに著者は、初期建物施設の性格を明確にするため構造にも着目する。それには全て退間や庭を備え2室ないし3室に分けられていて、中心をなす講堂址においては、1つの屋根の下に2つの部屋が作られた一棟二室建物で、東西に翼舎がある独特な構造をなしていたとする。このような構造は、半島の古代寺院で発見される講堂建築とは異なるが、神主を象徴する長方形巨石を伴い祭祀関連施設に分類される集安東台子遺跡に類例がみられるとし、陵山里のそれも元々は講堂ではなく祭祀関連施設であったと想定する。とすれ

ば陵山里古墳を伴う王陵祭祀との関係が想起されるが、瓦建物址の存在から百濟艇止山遺跡のような殯殿であったとはいえ、仏教の盛行した梁・北魏や高句麗の東明王陵と定陵寺などにみられる、陵墓と寺院ないし陵の修理・祭祀を行う建物が結合した事例に注目する必要があると述べる。ただ、中国では王陵付近の祭祀関連施設は両側に翼舎を備えて「廟」と呼ばれたが、陵山里の講堂址はそれに似通いつつも総合的に判断すれば、国家祭祀を行う宗廟・仇台廟とはいえないと指摘する。著者の見解としては、陵山里寺址の初期建物址群は、建物の構造と配置、出土木簡などの共伴遺物との関係、567年以後の状況などから、陵山里古墳群の築造や聖王を追福するための各種祭祀を執り行った祠廟あるいは祠堂施設とみなしている。なお最後にまとめとして、寺院の変遷過程を大きく3期に区分し、祠廟（初期建物址群）から567年の木塔建立にみられる陵寺（寺院伽藍）への変化を、性格においては祭祀機能の継続という視点で考えてみたいと結論づけている。

IVでは、泗泚遷都後最初に成立した百濟式寺院「定林寺式伽藍配置」が以後百濟地域でいかに展開したかを、伽藍配置の発掘成果をもつ各寺院との関連性から考察する。また、同じく塑像についても一層総合的に考察するために、扶余・益山などの百濟故地はもとより周辺国家の出土塑像にも広く目を向ける。

著者はIIで定林寺式伽藍配置を、「日本の四天王寺式伽藍配置と酷似するが、講堂と回廊が北回廊で連結するのではなく、東・西回廊北端の付属建物、講堂址東西の別途建物と連結し、相違する。このような様式の伽藍配置は、塑像をはじめとする共伴遺物と文献記録などから、泗泚遷都（538）以後、中国南朝の影響を受けて成立したが、一部、高句麗の影響も受けていた」と提起した。IVではこれをもとに、まず、百濟泗泚期の寺院跡のなかで伽藍配置のわかる扶余の定林寺址・陵山里寺址・軍守里寺址・王興寺址・東南里寺址、益山の帝釈寺址・弥勒寺址、扶余の恩山金剛寺址・扶蘇山廢寺址に対しても、

最近までの発掘成果を概観する。これにより、百済寺院の原型(プロトタイプ)が「定林寺式伽藍配置」にあることを再度強調し、その伝統は基本的に百済滅亡期まで続いていたと結論づける。ただし著者は、軍守里寺址や王興寺址が造営された6世紀中後半頃から一定の変化が生じ、6世紀末以後には付属建物や別途建物、講堂といった施設が省略される事例が増加することや、7世紀前半にあらわれた弥勒寺址の三院並列式伽藍配置のように、定林寺式伽藍配置をベースにしつつも中国の多院式寺や弥勒思想の影響を受けて変形した例もあることを指摘する。ともあれ、このような様式も広い意味で「百済式伽藍配置」と提起でき、さらには6世紀後半の新羅の皇龍寺址の重建伽藍や倭国の飛鳥寺にみられる三金堂の造営も、これを継承したと強調している。加えて、陵山里寺址の講堂址で確認された「一棟二室建物址」も、最初に確認されたのは中国集安東台子遺跡であるが、最近では益山王宮里遺跡の第一建物址、弥勒寺址の講堂址と僧房址、さらには慶州感恩寺址の工房址でも確認されているので、百済建築の特徴・機能並びにその流れを理解するうえで重要な意味をもつと補足する。

また、Ⅱでは定林寺址出土の塑像を、他の百済故地並びに中国や日本における出土塑像との比較を通して、元来木塔を荘厳していた塔本塑像であったことを明らかにした。ここではさらに、扶余の陵山里寺址・旧衙里寺址・臨江寺址・金剛寺址・旧橋里寺址・扶蘇山廢寺址、忠南青陽の汪津里窯址・本義里窯址、益山の帝釈寺址廢棄場遺跡・弥勒寺址・王宮里遺跡で確認された塑像についても出土様相を整理し、展開過程と特徴までを考察する。詳細は触れないが、まず541年の定林寺址以降に展開した上の出土塑像の製作時期の順序を、『観世音応驗記』の639年の焼失記録により武王代初期(7世紀前半)であることが確実な帝釈寺址のものを基準に推定する。次に製作技法として、胎土・成形方法・焼成の有無などを調べ、特に成形について范型使用の有無、芯木の使用痕、頭部と胴体の結合方式などから、手捏法・范拔・手捏法と范拔の混用のものがあるとし、成形後にも焼いたものと乾燥させたものがある

という。それらは主に寺院の木塔の塔本塑像、金堂の主尊仏として安置されていたと推定できるが、その背景と系統を特定する上で、釉薬が施された塑像や焼成塑像の存在は重要であった。このような製作技法は、中国南京地域の仏教寺院（上定林寺に推定される鍾山二号寺址など）から出土した塑像と一致し、釉薬の塑像は北朝地域の仏教寺院でいまだ確認されていないことから、技術的な系統が南朝と連なる可能性を示唆すると述べる。さらに著者は、周辺諸国の塑像との関連性についても詳細に探究する。高句麗の元五里寺址出土塑像や新羅の四天王寺出土緑釉磚はもとより、日本の四天王寺木塔関連の文献にみられる仏像や川原寺裏山遺跡出土の塑像などについても、百濟塑像の製作技術の特徴がみられると指摘する。特に川原寺裏山遺跡出土品の場合、廃棄状況だけでなく製作技法（釉薬を使用して焼成した緑釉磚）も益山帝釈寺址廃棄場出土のそれと酷似しており、百濟滅亡以後の遺民による技術伝播の可能性を想定しようと論じる。

最後に、瓦・塑像などの遺物や伽藍などの遺構により明らかになった百濟寺院遺跡の古代東アジア文化交流史における位置を確認し、その歴史的意義の大きさを次のように強調する。つまり、「百濟の寺院造営・仏教文化は、中国の南朝からの技術提供を中心に高句麗・中国北朝・隋唐の影響を受けた国際色豊かな特徴であったが、それらを内在化させて百濟独自の洗練された寺院・仏教文化を作り出した。そして新羅・倭国など周辺国家に伝授できるほど完成度の高い特性を持っていた」と締めくくられている。なお、著者が百濟の技術提供・百濟との文化交流によって造営されたと位置づける、新羅の興輪寺・皇龍寺や倭国の飛鳥寺については、本年5月に刊行された李炳鎬氏のもう一つの著書である『百濟寺院の展開と古代日本』（塙書房、2015）に収録された個別論文⁽⁵⁾で詳述されている。

3. 本書の意義

これまで本書の概要と特筆すべき点を述べてきたが、次に評者の問題意識をふまえつつ、本書の意義を指摘したい。

百済の寺院並びに仏教史に関しては、1世紀以上にわたり調査・研究がなされ日韓において様々な論著が出されてきた。特に近年の発掘成果はめざましく、舍利関連の国宝級の品々、木簡・銘文などの出土文字資料の新発見が相次いでおり、関連のシンポジウムも頻繁に開かれその成果を活字化したものも数多く出版されている。また、こうした華々しい成果を受けて、2015年7月に公州・扶余・益山の百済遺跡は世界遺産に登録された。

本書も当然こうした寺院遺跡・出土遺物を対象にその分析の上に成り立っているが、本書の研究方法の特色としては、考古学をメインにしながらもそれに埋没せず、文献・美術史・建築史など総合的な視点からそれらに接近していることである。百済寺院研究には豊富な蓄積がありながらも、美術史などの観点を念頭に置いた専門的な研究はほとんどみられないので、本書は学際的な立場でそれに挑んだ最初の論文集ともいえる。

何より本書の最大の特徴は、著者自身が遺物・遺跡と常に向き合う学芸員である立場をフルに活かして、博物館の収蔵庫に保管されて見向きもされなかった遺物や、寺院研究の花形である伽藍配置の中では埋没されていた遺構に対して、ひとつずつ丹念に整理している姿である。本書に収められたミクロなデータを表示する図版、出土地点と出土数を精査した一覧表及び豊富な写真類は、これだけでも後学の研究の発展に多大な役割を及ぼすであろう。そして著者は、整理した微細な資料の復元をもとに、定林寺址や陵山里寺址など重要な遺跡の性格を既存の研究とは大きく異なる側面から論じている。

まず、今も扶余（泗沘都城）の市街地に石塔を中心にそびえ立つ定林寺址は、百済寺院の象徴とされながら性格・機能はもとより、創建年代についても6世紀中葉から7世紀前半まで諸説あり、実に曖昧な存在であった。こうした

大きな問題に対し著者は、遺物の破片である塑像から石塔に先行する木塔の存在を突き止め、塑像のモチーフ・特徴からその木塔の年代までを明らかにしたのである。さらには、礼仏の塑像などによって、泗泚遷都を断行した聖王の政治的意図までを読み取り、仏教寺院を超えて政治・社会史の部分にまで踏み込んでいる。多くの百濟史研究者は史資料の不足をあげるが、本書のような遺物・遺跡に接する堅実な態度は、これを乗り越える指標と思われる。

次に、評者も研究実績をもつ陵山里寺址出土木簡についてである。既存の研究では木簡自体の研究（記載内容・形式・用途）にもとづき木簡及び遺跡の性格を解明したが、著者は前述の遺物と同様に、見過ごされてきた（明確に公表されていない理由もあるが）些細な木簡出土遺構に注目する。ひとつずつ木簡の出土現況と位置を綿密に調査し一覧表にまとめ、それにより既存の見解にみられる中門址南側の初期自然水路以外に東南側の初期自然排水路及び第二石築排水施設や割石集水槽からも出土していることを指摘し、ゆえに木簡全体を一括りに説明できないことを立証した。これは今後の韓国木簡研究で取るべき研究方法でもあって、大きく評価したい。

さらに本書の最も大きな意義といえるものは、長い伝統をもつ百濟寺院研究では金堂・塔を中心に伽藍配置の構造を考える方法が定着しているが、著者は極めて注目度の低い「付属建物」の存在に目を向けその役割を考えることで、既存の見解に異を唱えている点である。まず定林寺址において、講堂の東西に別途建物（東堂・西堂）があることを発見し、講堂と回廊はそれに連結していることを明らかにして、そこから中国南朝と高句麗の事例と比較しながら、これを百濟で考案された百濟式寺院（「定林寺式伽藍配置」）と定義する。これは、既存の類型把握に埋没しない新たな研究姿勢を直接示すものであり、単純な伽藍配置を当てはめて～式と解釈することの危うさも知らせてくれる。

また陵山里寺址でも、瓦などの遺物をもとに中心部の変遷過程を推定しながら、見過ごされてきた初期建物址群などの存在を指摘し、それが寺院に先

行して建立されたことまで明らかにする。これも既存の伽藍配置にとらわれない視点といえるが、さらに、先行する建物群に対して祠廟（祠堂施設）のような祭祀関連施設と位置づけ、祠廟から陵寺への移行を説いている。こうした大胆な仮説は、資料的根拠なく古墳に連結するから陵寺とされた既存の単純な見解に一石を投じる内容となる。加えて、詳細は述べないが施設と陵山里木簡の関係も、既存の諸見解を十分理解・批判しながら著者の見解を提示しており、評価できる。

このように著者は、既存の研究で注目されてこなかった遺物と遺跡を通して、百濟寺院・仏教の解明に努めている。なお、これらの資料を一層活用するために、韓国はもとより日本・中国での関連分野の研究史を丁寧整理し、それらの成果や問題点を十分にふまえて論証に努めているのも本書の特色である。さらに本書では、百濟文化の国際性はもとより、それが東アジア文化交流史のなかに占める位置までが提示されていて、こうした広い視野も著者の本研究に対する意気込みを感じさせる。

4. 若干の疑問点

とはいえ、本書に掲げられている論点を検討してみるならば、今後さらなる研究を要する部分や、いささか疑問と思われる点がいくつかみられる。

まず全体に関わる内容から述べる。本書では、百濟式仏教寺院の成立を泗泚遷都直後の「定林寺式伽藍配置」と想定し、その後の展開を強調する。ならば、少なくとも527年に同じく南朝の技術提供によって創建された大通寺をはじめ、熊津時期の仏教寺院との比較が必要なのではないか。さらに定林寺の創建には、541年の南朝との関係と高句麗の影響など対外的な側面のみが強調されているが、百濟式仏教寺院の成立意義を強調するためには、熊津時期以来の仏教の動向並びにそれをとりまく国内事情、さらには泗泚時期に続くその流れが一層検討されなければならないと考える。

寺院の成立・展開と関連して著者は百濟式という用語を多用するが、この

理由としては、本書で述べられているように植民地史観を克服するためであった。本研究の究極の目標も、本書の最後に述べられているように百濟文化の先進・国際性を東アジア文化交流史のなかに位置づけることであった。このなかで著者は、倭国や新羅など周辺諸国との関係にも触れているが、外交史よりは文化交流の側面から後進国の倭国や新羅にも百濟式寺院が伝えられたことを強調している。とすれば、百濟式を主に置いた研究方法は、日本と韓国の立場が逆転しただけで植民地史観とも表裏の関係にあったとみてとれるのである。また本書は、引用文献からもわかるように、理論的な部分は日本人研究者（その大半は日本の古代史・仏教を研究する者）の論著に依拠しており、寺院を建てた人々の歴史、百濟王権を中心とする百濟史の視点にはそれほど触れられていない。文化交流史を銘打つためには東アジア史の成果は重要であるが、百濟式を強調するのであれば百濟史全体のなかでそれを検討することが一層不可欠となると思われる。加えて、本書では滅亡時期まで一貫して百濟式の展開を指摘するが、例えば寺院を建立した王族・貴族の信仰・仏教思想にも変化がなかったのかも検討課題となろう。

このような日本の研究成果に多くを学ぶ著者の姿勢は、遺跡の評価問題にもあらわれている。本書の最も称賛できる部分は、注目されなかった小さな遺物、付属的な建物跡・水路跡の整理から導かれた遺跡の検討であった。それゆえ少々惜しいと思われるのは、最終的な遺跡に対する説明・評価が、陵山里の初期建物址＝祠廟、定林寺の付属建物址＝東堂・西堂（僧坊）などのように、常に既存の中国史や日本史・高句麗史で一般的に使用された概念によっている点である。誤解のないようにいえば、著者の膨大な努力の末に明らかになった遺物や遺構の実体が、日本や中国の既存の概念を当てはめることでかえって埋没してしまっているように思われてほかならない。当然、こうした概念は百濟式とは程遠いものであるので、結論もそのようにならざるをえない。

例えば陵山里寺址の初期建物址である。著者の努力により陵寺に先行する

建物址の存在が明瞭になったことを知り、陵山里木簡の性格を羅城との関係で考えた評者としては非常に興味を覚えた。しかしながら本書では、建物址と羅城・東門の関係（両者が結びつかないとすればその根拠）は示されていない。この建物址をとりまく寺院建立以前の泗泚都城史を考えれば、当然羅城や東門との関係が最初にクローズアップされるべきだと考えるが、著者は百濟史よりは古墳と陵寺の関係を扱った既存の研究を優先させているといわざるをえない。ところで、評者が考えるには、万一、後の陵寺に変化を遂げる建物群が遷都直後に羅城・東門を念頭に建立されていたとすれば、これこそが他の東アジア史を越えた百濟式の存在を示しているのではないか。ともあれ、この初期建物址は都城の都市計画と直接関わる施設であるので、陵寺と結びつくから祠廟というような既存の概念にとらわれない検討が一層必要であると考え。なお、本題からは少々逸脱するが、木簡の性格を直接左右する自然排水路についても、羅城や東門との関係がもう少し検討されても良いように思われる。

加えて、定林寺を都城のランドマークと評価したことに対しても同様のことを指摘したい。著者は都城内の道路遺構を隈なく精査し、王京区域に対しては最近までの発掘調査を踏まえて実証しているが、それらとの関係から導いた定林寺に対する最終評価は、寺院の位置だけみればわかるような非常に単純なものである。遺跡の問題からは離れるが、定林寺の役割・機能を考えるには、やはりその場所に集まった僧侶をはじめ王族・貴族などの人々に焦点を当てた検討がなされなければならないだろう。倭国で飛鳥寺がクローズアップされているのも、伽藍などの構造以上に王権と直接関わり、高句麗僧惠慈や百濟僧惠聡などの僧侶をはじめ多くの人々が集まる場所であったからである。さらに、定林寺の展開を考えるためには、百濟滅亡後に百濟故地を占領した熊津都督府が、定林寺の五重石塔に戦勝記念碑を刻んだことも視野に入れておく必要がある。

最後に、ここ数年来研究のめざましい外交史と関連して2、3指摘したい。

著者は中国との仏教交流においては、一貫して南朝との関係を軸に置いている。ところで近年の研究成果によれば、威徳王代以後の北齊・北周のみならず、6世紀前半の武寧王代から北朝とも外交関係を築き仏教交流を維持していたことが指摘されている。実際に、本書の寺院跡からも北朝関係の遺物が発見されてきているので、著者の認識でよいのか再検討が必要だろう。

また本書に限ったことではないが、仏教及び仏教文物は文化的に高い王権・国家が外交関係の打開を意図して送ったという立場で論じられることが多い。しかし、それらを伝える側・受容する側双方からの研究が一層必要であろうし、時として受容する側と送る側の関係が逆になること（百濟と倭国の関係でいえば、倭国が百濟に仏教文物を送ること）もあったのではないか。さらに、6世紀後半に肥後地域の豪族出身の日羅（日羅を僧侶と考える説もある）が百濟と倭王権の双方で活躍したことなどを勘案すれば、仏教文化交流においても国家間の外交のみならず地域間の交流にも留意する必要があるだろう。

5. おわりに

以上やや批判めいたことも述べてきたが、本書の価値がそれによっていささかも損なわれるものでないことをここに断わっておきたい。何より本書に接し、百濟史は史資料が少なく研究が難しい分野だと言われるが、堅実な資料整理・研究によればそれは十分解消できることを痛感させられた。

また本書を通してわかるように、国家の枠組みを超えた視点から百濟の仏教・寺院史を解明しようという試みは、これまで主に日本側においてなされてきた感が強いが、近年では韓国側でもそうした研究が増加している。さらに百濟地域では発掘調査が盛んであり、今後も多くの新発見が期待される。それゆえに、両者間の研究交流は今後さらに要求されていくであろうし、本書がその一翼を担うことを評者は願うのである。

註

- (1) 本書の原題は、「이병호 『백제 불교 사원의 성립과 전개』 사회평론, 2014」である。
- (2) 第2部は、本年5月に日本で刊行された『百濟寺院の展開と古代日本』（塙書房、2015）に収録されているという。
- (3) 李炳鎬「扶餘 定林寺址 出土 塑造像 製作技法과 (と) 奉安場所」(『美術資料』72・73 合併号、2005)・「扶餘 定林寺址 出土 塑造像의 (の) 製作時期와 (と) 系統」(『美術資料』74、2006)。
- (4) 本書の書評は、すでに本年3月にも韓国の雑誌に次のものが発表されている。
金寿泰(김수태)「東アジア文化交流史の中の百濟仏教史研究の摸索 (동아시아 문화교류사 속의 백제 불교사 연구 모색)」(『韓国古代史研究 (한국고대사연구)』77、2015)。
- (5) 「第三章 新羅の初期寺院に見える百濟の影響」・「第四章 飛鳥寺三金堂と日本の初期寺院の源流」・「第五章 飛鳥寺に派遣された瓦博士の性格」など。